

史跡 昼飯大塚古墳

第8次調査 現地説明会資料

2004.11.20 岐阜県大垣市教育委員会 第6号

今回の調査の目的

ひるいあおつか
昼飯大塚古墳では、昭和54年度の名古屋大学による測量と周壕の調査、平成6年度からの6次にわたる大垣市教育委員会による範囲確認調査がおこなわれています。第8次となる今回の調査は、平成12年度に国の史跡に指定された昼飯大塚古墳の史跡整備事業の一環として、大垣市教育委員会が主体となって、10月18日より約1ヶ月間の予定で発掘調査を実施しています。

今回の調査の目的は、後円部頂を対象に、第7次調査において墓壇内西部で出土した副葬品の性格を解明すること（南北第2サブトレンチ拡張区・東西サブトレンチ）と、
ねんどかく
竪穴式石室の南側に平行して確認された粘土槨の規模を特定すること（南北第3サブトレンチ・南北第4サブトレンチ）です。

調査成果

もっかんじきそう
西棺〔木棺直葬〕 第7次調査では竪穴式石室〔北棺〕にともなう副室の存否を確認するために設定した南北第2サブトレンチの西壁付近で、鉄製刀剣・鉄製農具

などが出土しました。これらの副葬品の性格については、次の二つの可能性を考えることができます。一つは埋葬にともなわずに副葬品のみで埋められた可能性、もう一つが副葬品の西側に別の埋葬があり、これにともなうものであるという可能性です。

そこで、南北第2サブトレンチを一部西側に拡張するとともに、東西サブトレンチの西端部分を掘り下げて、そこに埋葬があるかどうかを確認することとしました。

調査の結果、前回副葬品が出土した位置より西側のやや高いところで、木棺と想定される痕跡を確認しました。この痕跡は、前回の副葬品と同様、ほぼ南北を主軸としています。したがって、第7次調査で出土した副葬品はその棺外副葬品である可能性がきわめて高く、ここには石室と粘土槨とは別の埋葬が存在すると考えられます。

木棺じたいは長い年月のあいだに腐朽したため残っていません。トレンチ壁面の土層をみると、木棺の上部の土が棺の腐朽にともなって、棺の内部に落ち込んでいる状況を観察することができます。落ち込みのなかには赤色顔料が混じった褐色砂質土

が堆積しています。いっぽう、棺の周囲には礫と粘土の固まりが混じるやや明るめの色をした粘質土が存在しています。褐色砂質土と粘質土とのあいだには、赤色顔料がみとめられることから、棺の内部は赤く塗られていたようです。

土の違いから想定される木棺の大きさは、長さ 5.2m 以上、幅 55～60 cm をはかる長狭なものです。幅はわずかに南側が狭く、北側が広いことから、遺体は北枕で埋葬されたと考えることができます。棺の主軸が石室および粘土槨のものにたいして、ほぼ直交する点が大きな特徴です。

棺の周囲にある礫と粘土の塊を多く含む粘質土は、トレンチの南壁面をみると 2 層に分離することができ、下層は棺外副葬品を配列した面に相当します。上層は、棺の落ち込み部分の土にも同質の土がまばらに混じることから、棺外副葬品と棺上部をも覆うものであったようです。こうした埋葬方法を、石で棺のまわりを囲む石室や、きめの細かい粘土で覆う粘土槨とは別に、木棺直葬と呼んでいます。

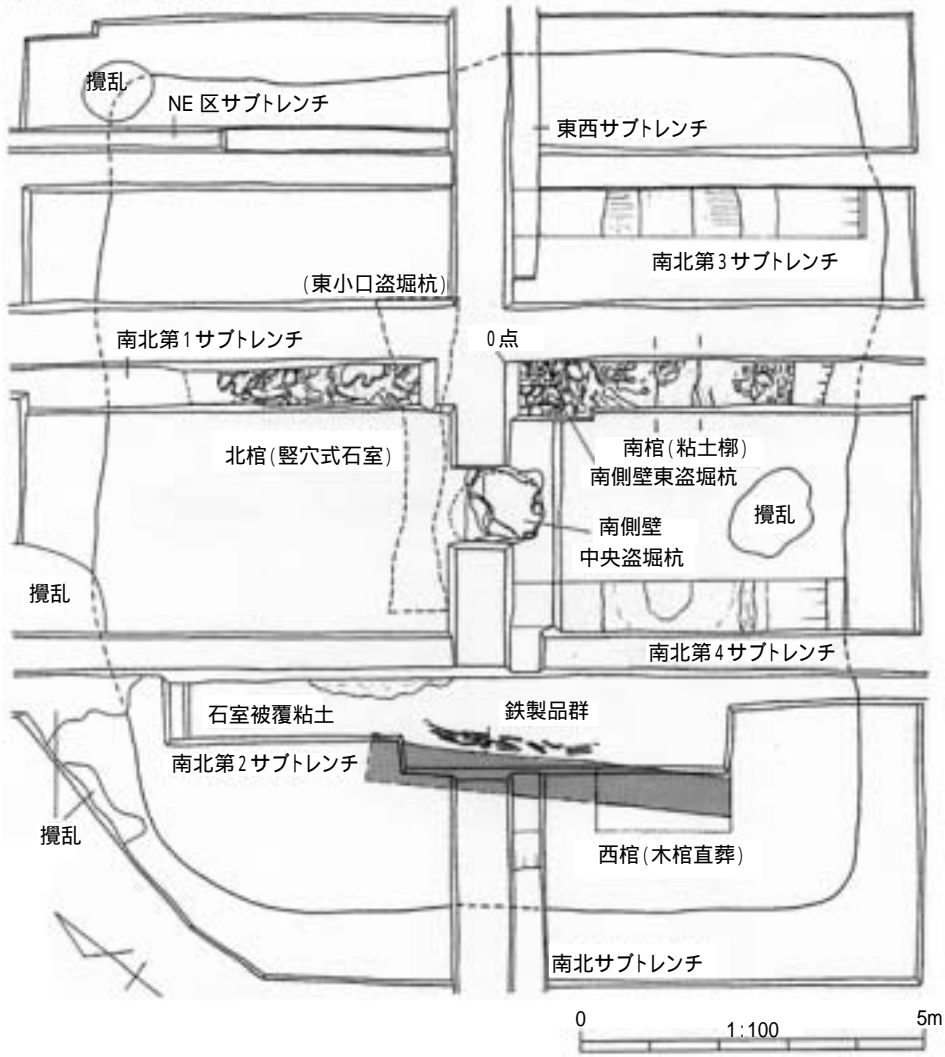
南棺〔粘土槨〕 南棺は第 7 次調査であきらかとなった粘土槨におさめられた木棺です。今回の調査では、想定される粘土槨の両端をおさえるために、南北第 3 サブトレンチと南北第 4 サブトレンチを設定しました。

南北第 3 サブトレンチでは、粘土槨の東

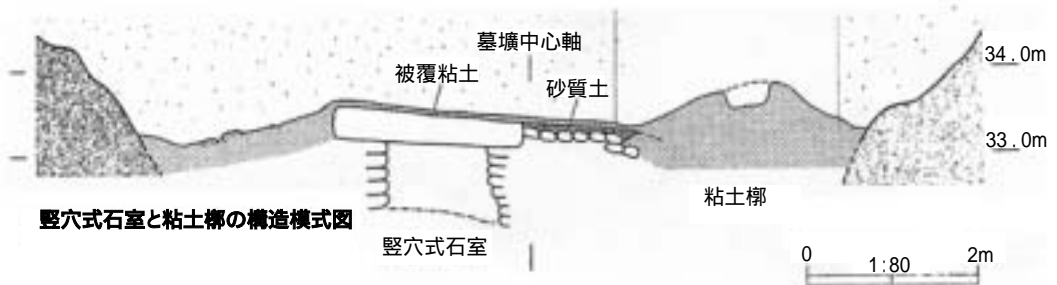
端を検出することはできませんでしたが、内部におさめられた木棺が腐朽してできた、落ち込みを検出しました。落ち込みの幅は約 80 cm あります。粘土槨の表面には、上下方向に筋状のくぼみがみられます。

南北第 4 サブトレンチでは、棺の落ち込み部分の西端をおさえることができました。南北第 3 サブトレンチとは落ち込みの状況がやや異なり、^{ひぶくねんど}被覆粘土が砕けてやや浮いた状態となっています。落ち込み部分より西側は、粘土槨上面の高さが西側へと低くなっているため、粘土槨の西端に近い部分であると思われます。表面の状態が南北第 3 サブトレンチとは異なって、平滑であることは、粘土槨の構築方法を考えるうえで興味深いものといえます。

粘土槨の長さは、東側の墓壇壁面の傾斜を考慮すると 8 m 程度と想定でき、その幅については第 7 次調査の南北第 1 サブトレンチで約 3 m という数値を得ています。粘土槨におさめられた木棺の落ち込みは、現状で長さ 6.4m 以上、幅 80 cm 程度あり、推定される全長は 7 m ほどとなります。棺の落ち込みの床面は、東側が西側より若干高くなっていることから、遺体は東枕で葬られたと想定できます。この粘土槨は非常に長大な木棺をおさめた施設であり、南北第 3 サブトレンチでは若干の攪乱をうけていますが、遺存状況はきわめて良好です。木棺を被覆した粘土も厚く、全国的にみても



第1図 調査区略測図



竪穴式石室と粘土槨の構造模式図

大型の粘土槨と評価できます。

各棺の関係 さらに、今回の調査では、これまでに規模と構造の一部が判明している竪穴式石室におさめられた北棺を含めた、埋葬施設どうしの関係を知る若干の手がかりを得ることができました。

南北第2サブトレンチでは、一部で竪穴式石室の天井石を覆う被覆粘土が検出されています。この被覆粘土は西棺の棺外副葬品をおいた面の直下で確認できることから、竪穴式石室の被覆後に西棺の棺外副葬がおこなわれたことが確実です。また、第7次調査では南北第1サブトレンチにおいて竪穴式石室の被覆と粘土槨の被覆が同時におこなわれていたことを確認しています。それぞれの埋葬から被覆までの時間幅が比較的短いと想定できるならば、石室と粘土槨の構築は同時進行でおこなわれた部分が多く、西棺の埋葬はそれらより若干遅れたものであったと推測することもできます。

さらに注目できるのが、西棺の棺外副葬品を被覆していた粘質土です。この粘質土は墓壙内の広い範囲に存在しており、南北第3および第4サブトレンチの粘土槨の両脇はこの層の上面にあたります。西棺棺外副葬品がこの粘質土の下から出土していることから、この土層はそうした副葬品を覆うものである可能性とともに、墓壙内における最終的な副葬行為を反映したものである可能性を考慮できます。また、この層が

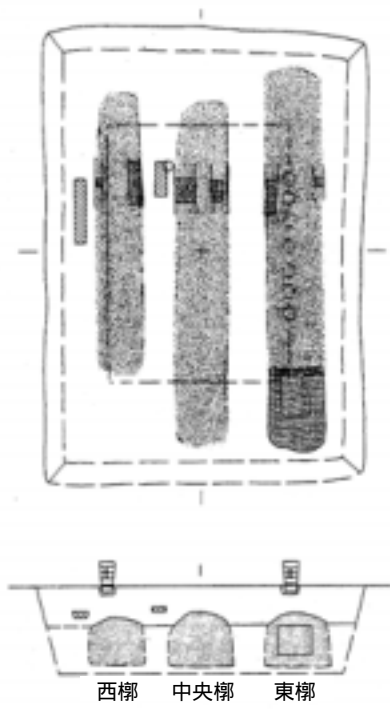
墓壙内に広く存在することからも、同一墓壙内にこれらの埋葬がおこなわれていたことを追認できます。

まとめ

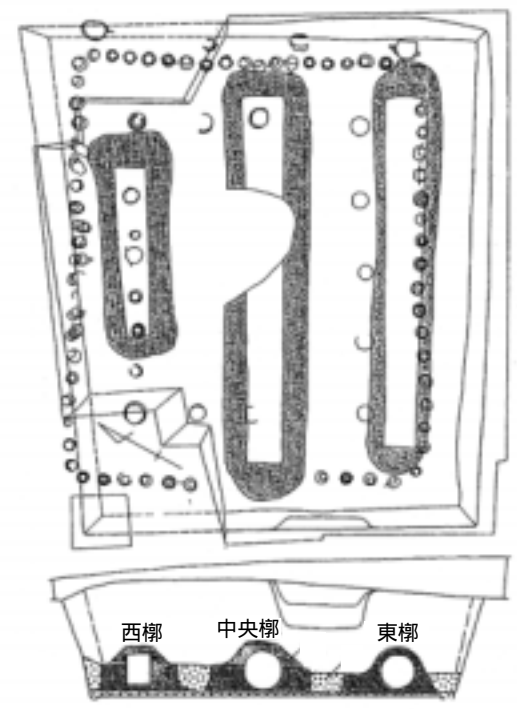
これまでの調査で、昼飯大塚古墳の埋葬施設について、ある程度の情報を得ることができました。

まず、埋葬方法として三つの棺が同一の墓壙のなかにおさめられた事例であることが判明しました。同一墓壙内に三棺を埋葬する事例は、三重県石山古墳、兵庫県行者塚古墳、大阪府心合寺山古墳、滋賀県熊野本19号墳の4例がこれまでに確認されており、昼飯大塚古墳は5例目となります。

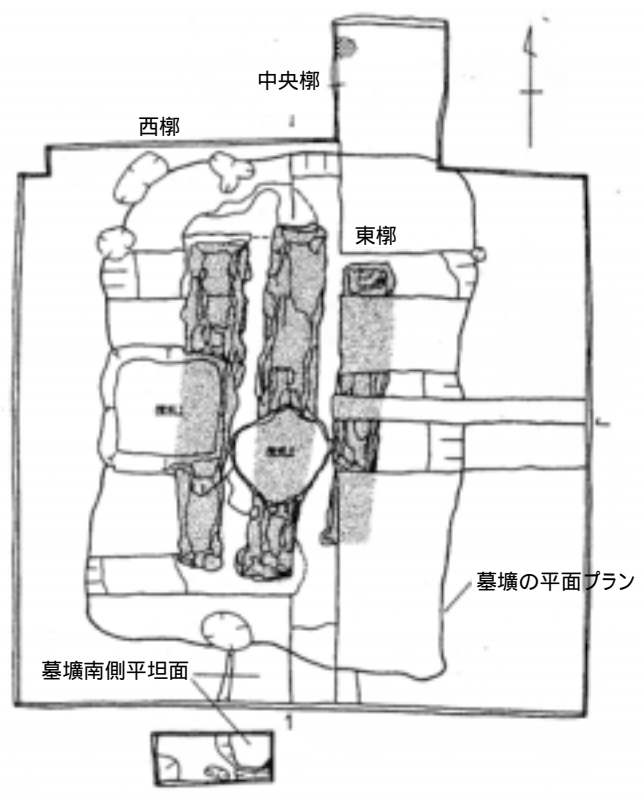
これまでに確認されている同一墓壙三棺埋葬例は、いずれも三棺が並行しています。三棺埋葬のなかに、主軸の異なる木棺が含まれていたことが明らかになった点も注目できます。西棺の埋葬は、竪穴式石室と粘土槨の西端がほぼ一致するとともに、全体に墓壙の東寄りに構築されていることから、主軸は異なるもののすでに予定されたものであったと考えられます。しかも、竪穴式石室と粘土槨のあいだに後円部頂の円形埴輪列の中心点が位置することからも、三棺の埋葬が計画的なものであったとみなしうる点がきわめて重要です。それぞれの棺の埋葬の時間的關係についても部分的ながら



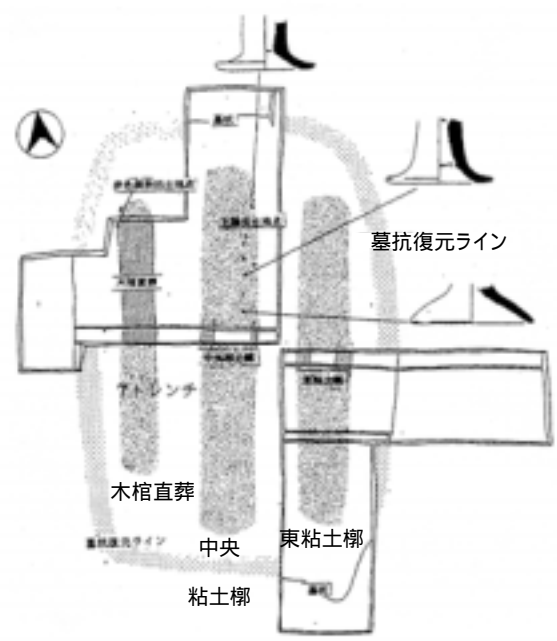
1. 兵庫県行者塚古墳



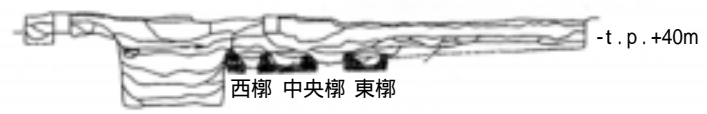
2. 三重県石山古墳



3. 大阪府心合寺山古墳



4. 滋賀県熊野本19号墳



第2図 同一墳三棺埋葬の類例 (S=1/150)

明らかになっており、当時の埋葬を考えるうえでも貴重な事例といえます。

さらに、同一墓壙におさめられた木棺の埋葬方法がそれぞれ異なることを確認できた点は、被葬者どうしの関係や、この時期の古墳における埋葬のあり方を考えるうえでわけて興味深いものといえます。同一墓壙三棺埋葬例では、多くが粘土槨という埋葬方法を採用しています。熊野本 19 号墳では、粘土槨と木棺直葬の二者が存在しますが、この時期の木棺直葬は粘土槨を簡略化したものであるという側面もあり、両者の構築方法には共通性がみとめられます。竪穴式石室と粘土槨、木棺直葬という埋葬方法の混在は、いまのところ昼飯大塚古墳だけに確認できるもので、きわめて稀な事例ということが可能です。そもそも同一墓壙における二棺埋葬例でも竪穴式石室と粘土槨が混在する例はきわめて少なく、両者の構築方法の違いが大きいこととも無関係ではないようです。

これまでに確認されている、同一墓壙三棺埋葬例でも、棺の形式が異なるものや、

著しく長さを異にするものが確認されています。昼飯大塚古墳は、棺の形式については不明ですが、そうした違いが棺をおさめる槨や埋葬頭位にもあらわれた極端な例といえるかもしれません。

木棺の長さでいえば、粘土槨におさめられた南棺が 6.4m 以上と最も長く、ついで西棺が 5.2m 以上、竪穴式石室におさめられた北棺が 4.5m 以下となります。従来、被葬者の階層的位は、木棺の長さが長いものほど高く、竪穴式石室から粘土槨、木棺直葬の順で低くなると考えられてきました。しかし、昼飯大塚古墳では、竪穴式石室におさめられた木棺が最も短く、これまでの理解にはあてはめにくいものです。

こうした棺の長さや種類、槨の構造が、階層の違いによって左右された側面を完全に否定することはできませんが、それだけではなく、生前の被葬者のさまざまな立場を反映したものである可能性を考慮することができます。

史跡 昼飯大塚古墳 第 8 次調査現地説明会資料

編集・発行 岐阜県大垣市教育委員会

岐阜県大垣市丸の内 2 丁目 55 番地

(0584) 81 - 4111 (代)

発行日 平成 16 年 11 月 20 日